

言い換えると、イエス死後二千年間の準備期間があつてメシアの仕事は成就するよといふ約束のもとにイエスは出てきた。今がちょうどイエスの死後二千年、アトランティスの没落から一万三千年後。この歳差運動図でいうと、極点の「現在」という所から、ここから人類の目覚めの意識が急速に起こってくる。イエスの仕掛けたメシアの仕事が再び芽を吹く。イエスの教えも仕事も芽を吹いて、地球人の目覚めを起こし一万三千年の悲願である全人救済の仕事が現実成功していくんです。そのためにヘブライ人は神との約束をしてきた。メシアキリストも出た。そういうことではないでしょうか。

### 3 — エッセネ派（イエス）の流れはどこへ行つたか

イエスの流れ、そこに契約の箱もあるのかもしれない。十戒もあるのかも分からない。メシアたち（集団）がそこから出るのかも分からない。どこへ行つたか？

# 1. 失われた十支族——契約の箱のある所（日本?）、メシアはダビデの豎琴を弾く

実は日本に來ているという説があります。ふるい明治の昔からあつて、その証拠があるからです。その証拠とは日本の神社のおみこし（御輿）、これはユダヤの契約の箱とそっくりです。バイブルにちゃんとつくり方、寸法まで書いてあります。二本の棒を通しなさいと、棒です、車ではない、かつぎなさいと。おみこしは担ぐでしょ、「ワツシヨイツ」「ワツシヨイツ」。そして全部、金箔にしなさいと。おみこしはそうです。そして天使の彫刻を置きなさいと、モーセは言つております。おみこしには羽を広げた鳳凰がありますね、あの鳥は天使です。おみこしはまさにモーセが命じた契約の箱の大きさに作られ、棒で担がれるようにされ、金箔で張られ、そして天使が（これは鳳凰の姿で）つくられています。今日日本人が担いでいる日本の神社の御輿、これ契約の箱ではないですか。この中に宝物があるのではないか、三種の神器はどこにあるか、天皇家にあるらしいんです。天皇家にある三種の神器は鏡、それから劍、そして勾玉まがたまです。ですからエジプトの神器とはちがいます。神鏡が十戒の石板に当たるものでしょう。レプリカでしょう。石板（鏡）と杖（劍）とマナ（勾

玉)、このレプリカを天皇は持っているのかも……。天皇はヘブライの流れ、正嫡ではないかと言われています、そういう説があるというお話です。

色々符合するんですよ。例えば京都の八坂神社の祇園祭の山車だし。これはまさにヘブライ人の山車だしとそっくりなんです。それから「八坂」は「イヤサカ」が「ヤサカ」になったんですね。

「ヤサカ」は何かというと、私たちは言われました。戦時中に私は学生義勇軍というのに入ってます、二千メートルの八ヶ岳高原に行つて農耕作業をやりました。そこに神社がありまして隊長に連れられて行くんです。そして祈るんじゃないんですよ、「イヤサカー！ イヤサカー！ イヤサカー！」と言つてお辞儀をするんです。そして帰ってくる。その時は「イヤサカ」はいよいよ栄えるという意味かと思つておりました。いよいよ栄えよ、いよいよ栄えよ、と。今考えてみると「イヤサカ」だった——イヤサカはヘブライ語（ユダヤ語）で神さまと叫ぶことを言う。その八ヶ岳の神社だけかと思つたら、家内に聞いたら戦時中に天孫降臨の地として有名な宮崎県と鹿児島県の県境にある霧島の高千穂の峰の頂上の神社に行きましたら神主が出てきて「イヤサカー、イヤサカー、イヤサカー」と三遍言わされたら、何の事か意味は分からなかったけどこの事でした。

「イヤサカ」とは「神よ」と叫ぶこと。そういう証拠が日本には沢山あるんです。例えば京都に広隆寺というお寺ありますね、あそこには有名な弥勒菩薩像がある、私は世界で一番あれが好きなんです。あそこに行つて一時間でも二時間でも居て見てるんですが、その広隆寺は秦氏はたが建てた、その秦氏が住んでいたのが、今の京都の太秦うずまさです。太秦うずまさは今撮影所がありますね。秦氏はたは今から千何百年前に、中国から朝鮮半島を通つて日本に來た人々です。この秦氏が建てた広隆寺の最初の名前は太秦寺たいしんじです。太秦寺というのは今から千二百年位前唐の時代に中国にありまして、そこでキリスト教（景教）を教えさせていたんです。それはそうとして、この「秦しん」というのは今から二千二百年前中国を統一した秦の始皇帝からきているようです。秦の始皇帝の秦と秦氏の「秦はた」と京都の太秦うずまさと太秦寺たいしんと皆同じ「秦」ですね。秦の始皇帝はヘブライ人なんです。中国人ではないんです。それは歴史を調べるとわかります。或る豪商がうまいことやつて、自分の息子を秦の国の王様の後継ぎにしたんです。それが始皇帝で中国を統一するんですが、ヘブライ人らしい人ですよ。だから秦氏は太秦寺を建てた。これが広隆寺なんです。私は行きましたが、広隆寺のそばに行くとき、イサライという井戸があります。これはヘブライ人がつくつた井戸だと書いてあります。何とあそこにはユダヤ人が住んでいたと、ちゃんと書いてあります。というこ

とはヘブライ人は日本に来ていた。失われた十部族は日本に来ていたのではないか、という証拠が色々あるんです。そして先程の資料2の系図でみるように、アブラハム以後の正統エフライム族は、日本の天皇ではないかと言われているのも一理あるかもしれません。

それではもう一つ証拠を示しましょう。青木由有子さんです。

青木由有子さんが自然音楽の作曲を始めたのは一九九九年の八月末〜九月ですが、実は八月二十六日から三日間の京都奈良旅行に重大な意味がありました。この三日間でその後三年間今日に至るまでの作曲の源のすべてを聞きとつているのです。この時に京都貴船神社で「龍神」の曲の源を聞いています。それから奈良の飛鳥（明日香）に石舞台というのがあります。巨きな石が置いてあつて何だか分からない。今でも歴史的に何に使われたのか分からない。由有子さんがそこに行つた時に、もつと向こう行け、もつと向こう行けという感じが、どうしてもするので仕方ない。ちよつと五分位歩いて行つたら野原に出た。石もあつた。そうしたら歌が聞こえてきた。おかしな歌、踊りも目に見えてきた、踊る人々が見えてきた、見たこともない人々が……。歌が聞こえ、踊りが見え、言葉まで聞こえてきたらしい。そのことばは正確かどうか分からないと本人は言うが、ことばも聞こえてきた。

イヤハエ

イヤハエ イヤハエ イヤハ

イヤハエ ヤハエ イーマルサンス

イヤハエ イヤハエ イヤハ

イヤハエ ヤハエ

不思議な歌ですね。その時に青木由有子さんはヘブライの歌を聞いたんですね。ヘブライの踊りを見た。そして京都では龍神の歌も聞いた。その時から現在に至る由有子さんの作曲が始まっていくんです。

「イヤハ（エ）」と歌ってましたね。それで私、思い出したんです。私が小学生の頃、長崎県の佐世保市に住んでいて小学四年までいた。そこに大きな八幡さまの神社があつて祭りが楽しみです、子供の頃見に行きました。山車だしが出るんです。山車に芸者さんが皆乗つていて、そして「イヤハー！」ポーンと太鼓を打つ、「イヤハー！」ポーン、「イヤハー！」

ポンポン、ずうつとそれだけなんです。この「イヤハー」というのは、だからはやしことばだと思っていたんです。今、由有子さんの歌「イヤハ（エ）イヤハ（エ）」と歌っていたでしょ。ヘブライ語で何ということばなの？ 知っている方おしえて下さい。（注）

その乗っていた芸者衆が祇園の芸者衆です。佐世保市に祇園町というのがあります、その芸者衆だったんです。祇園といえば八坂神社の祇園祭りですね。祇園の語源は多分「シオン」にあるのではないかと言われています。シオンが祇園になっている。シオンというのはヘブライの神さまを祭る神殿がある丘のことをシオンの丘というんです。それが祇園になった。それが佐世保では祇園芸者が皆山車に乗って「イヤハー」ポンポン、「イヤハー」ポンポン、これしかやらない、というかたちになっている。私いつも見てました。

日本にヘブライの謎、「失われた十部族」は来ていたのではないか、天皇家はその正嫡ではないか、三種の神器はモーセの三種の神器のレプリカではないか、どこかに別に、ホンモノの三種の神器が隠してあるのではないか、と私は思っております。それが今、青木由有子さんが歌った「イヤハエの歌」の存在、これは決定的な一つの証拠です。失われた十部族についていろんな学説があります。ユダヤ人が日本に来たという学説はあるけれども、青木由有子は音で聞いた。踊りを目に見た、ことばも聞いております。言葉は自信ないと

いうけれども、メロディーで聞いているんです。それは二千年前からのだと思えます。由有子さんが言うには、その土地でこれを聞いた時に、ほかの自然音楽は風が伝えるように聞くのだけれども、これは大地に刻印されているものが出てきているような感じがした、自然音楽とはちがうと言うのです。だからこれはヘブライ人たちがシオンの丘をおもい踊って歌っていたんじゃないか、それがその土地に刻み込まれていたのを青木由有子が聞いたのではないか。それを契機に青木由有子は作曲を始めた。だから自然音楽は、深くヘブライの契約と関係があるのではないか、モーセやイエスのヘブライの系統と深く関係があるのではないか。どうもそうらしいというお話です。

(注) 「イヤハエ」について

(1) 広辞苑による解釈

ヤハウエ [Yahweh] イスラエル人が崇拜した神。万物の創造主で、宇宙の統治者。

(2) ユダヤ人の A 氏の解釈

イヤハエは「ヤーベ」。イヤハエはモーセ様が神と対話したとき、あなた様はど